

「人生劇場 - 義理と人情 - 」特集

平成18年12月26日～平成19年5月27日



『人生劇場 残侠篇上』初版本函原画 中川一政画

尾崎士郎記念館

「人生劇場 義理と人情」特集

士郎さんといえば大作『人生劇場』、中でも数多く映画化され最も人気を集めたのが任侠の世界を描いた「残侠篇」です。

今回の特集は『人生劇場 残侠篇』を中心に「弱きを助け強きをくじき、義のためなら命も惜しまぬ」といった男気・侠客、これらを通じ吉良町のフレーズでもある“義理と人情”の描写を紹介します。

『人生劇場』 昭和8年(1933)3月から都新聞(現東京新聞)に連載され、「青春篇」に始まり、「愛欲篇」と「残侠篇」、「風雲篇」、「遠征篇」(後に「離愁篇」と改題)、「夢幻篇」、「望郷篇」、「蕩子篇」など全8編からなる。三州吉良横須賀村(現吉良町)から上京し、早稲田大学に学ぶ青成瓢吉の青春と、その後を描いた自伝的長編小説であり、非常に日本的な小説とみることができる。昭和10年(1935)3月に「青春篇」が刊行され、川端康成に絶賛されて大ベストセラーとなった。

『人生劇場』は「青春篇」刊行の翌年、内田吐夢^{とむ}監督によって映画化されたのを始め合計14作品も制作された。なかでも沢島忠監督による「人生劇場 飛車角」シリーズ、内田吐夢監督による「人生劇場 飛車角と吉良常」などがよく知られている。



『人生劇場 残侠篇下』
初版本函(表)

『人生劇場 残侠篇』 昭和11年(1936)12月に上巻が、翌年1月に下巻が竹村書房より発行され絶大なる人気を集めた。その後、版權は竹村書房から新潮社に移され、同年10月に新潮社より新装版にて再発行されている。

やると思えばどこまでやるさ
それが男の魂じゃないか
義理がすたればこの世は闇だ
なまじとめるな夜の雨

この「人生劇場」の歌は昭和13年に作曲され、後に早稲田大学の学生により台詞もつけられ国民的愛唱歌となった。しかし、「残侠篇」の映画化に合わせてできたものと思われ、歌のイメージや映画化された半数以上が



『人生劇場 残侠篇』挿絵

「残侠篇」を原作としており、「任侠超大作・人生劇場」などといった映画の宣伝も手伝って、『人生劇場』は「ヤクザ小説」だと思われる人も多いのではないだろうか。しかし、士郎さんは、『人生劇場 残侠篇』を刊行するにあたって、次のように述べている。



『人生劇場 残侠篇上』
初版本表紙

続々人生劇場、残侠篇はある意味で「吉良常篇」といふべきものである。しかし、作者は、これによつて市井任侠の徒の生活を描きださうとしたのではなく、もつとも高潮した愛情形式としての義理人情を見究めようとしたのである。すくなくとも今日の日本においては義理人情はもつとも低い生活感情と結びついてあるが、作者はこれを當然さうあるべき一つの高さにまで追ひつめたつもりである。吉良常の人間性が義理人情におさまるときよりもむしろこれを踏み越えやうとするときに独自の存在を示してくるのはそれだけ彼が純粋な人生認識に立ちかへるが故である。……

(『人生劇場 残侠篇上』より原文のまま表示)

このように士郎さんは、ヤクザ生活を描いたのではなく、「残侠篇」によって“義理と人情”を今日の生活と感情の中に見出したかったのである。

次に「残侠篇」の一節を紹介する。

やくざ家業には一つの理想がある。彼等は理非のそとに立って行動するのではない。彼等を動かしているのは原始的な感情としての心意気である。今日なお彼等を生かしているものは崩れ落ちたゴロツキ根性ではなくて伝統の中に聳えている侠客精神なのである。……中略……正義は表看板ではなくて心の底にひそめた信条である。人前に大きな面をさらけ出そうと思っている侠客があつたら正に外道に類する。意地があるからこそ張りがあるのだ。

この一節が物語るように士郎さんは、「侠客精神」をもって、“義理と人情”を描いたのではないかと思われる。そして、次のことばがそれを激しく描写する。

「……俺たちの渡世には命よりももっと大切なものがあるんだぜ……」

『人生劇場 残侠篇』より

<あらすじ> 『人生劇場』の主人公は青成瓢吉であるが、「残侠篇」(少なくとも前半)の主人公は、“義理と人情”の侠客小山角太郎、通称「飛車角」である。そして、それを盛り上げるのが、「青春篇」より登場している吉良仁吉の血を引くこれまた“義理と人情”に厚い侠客太田常吉こと「吉良常」だ。

大正14年、東京の下町砂村に青木金十こと「小金」が一家をかまえ幅を利かせていた。そこには、女(おとよ)を足抜きさせた飛車角が草鞋をぬいでいた。一方この土地では丈徳という男の勢力が日に日に伸びあがっており一触即発の状況であった。小金一家がいよいよ丈徳に対して最後の手段をとるよりほかに道がなくなつたとき、飛車角は義を貫いた。小金やその子分宮川らと殴り込みに加わり、丈徳を斬って勝利したが、出入りの最中、飛車角の兄弟分奈良平が裏切っておとよを連れ出した。おとよには300円という懸賞がかかっていたのだ。このことから、奈良平を斬った飛車角は非常警戒の網にひっかかり、



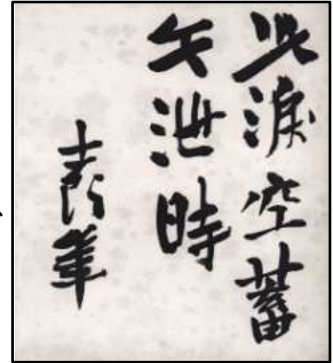
『人生劇場 残侠篇』
(新潮社初版本)表紙

逃げ込んだ家は留守の瓢吉の家であり、そこにいたのが吉良常であった。

奈良平の件で自首した飛車角は、おとよを想いながらも7年の刑をうけ前橋刑務所に服役したが、その間におとよは弟分宮川の女になっていた。宮川は女郎のおとよに惚れ、通い続けていた。宮川の知らないことであったが、皮肉な運命であった。小金一家にとって飛車角は大恩人なのだ。しかし、おとよに惚れ込んだ宮川は二人で逃げようとしていた。一方、吉良常はおとよに、飛車角に面会に行くよう勧めたが・・・苦悩するおとよは、瓢吉の青春の想いで女お袖と共に姿をくらました。

やがて飛車角が出所したとき、すでに小金は病気で世を去り、小金一家は丈徳の跡目を継いだデカ虎につぶされていた。飛車角に勘気された宮川は小金一家に義を立て、デカ虎に仕返しをする。

時は流れ、飛車角は吉良常と共に三州吉良港へ発った。そして、そこでおとよと再会する。一方吉良常は、長年の疲れで病床に伏し、やがて絶命する。飛車角もおとよも、お互いを想い続けていた。そして二人は・・・



土郎さん自筆色紙

『人生劇場 残侠篇』の中で土郎さんが飛車角や吉良常らの侠客たちの“義理と人情”の美しさを謳っていることはまちがいないだろう。しかし、その美しさは、滅び行くものの美しさと思われる。土郎さんは、侠客の精神（あるいは心意気・張り）などをおし、土郎さん流の新しい生き方“義理と人情”を描写したかったのではないであろうか。

「人生劇場 義理と人情 - 」特集の展示品目録

書籍	(『人生劇場 残侠篇』上・下 竹村書房発行初版本)	各1点
同上	(『人生劇場 残侠篇』新潮社発行初版本)	1点
函書原画	(『人生劇場 残侠篇』函等原画 額入り)	1点
新聞挿絵綴	(「人生劇場」都新聞掲載写)	2点
芝居パンフレット	(新国劇 昭和27年5月公演 明治座)	2点
写真	(映画「人生劇場 飛車角」撮影現場関係写真)	4点
色紙	(豊田 穰直筆色紙5枚組)	1点
同上	(土郎さん直筆色紙「比涙空蓄・・・」)	1点
色紙写	(土郎さん自筆色紙写「人のいのちの儚なさ八・・・」)	1点
映画台本	(内田吐夢直筆サイン「人生劇場 飛車角と吉良常」完成記念)	1点
同上	(「人生劇場 飛車角」シリーズ)	4点
雑誌原稿	(土郎さん直筆原稿「内田吐夢」 掲載雑誌不明)	1点
米粒画	(「人生劇場」米粒にて作製 吉良高等学校生徒作品)	1点
映画チラシ	(「人生劇場 残侠篇 昭和13年 」)	1点
同上	(「人生劇場 飛車角」)	1点
レコード盤	(シングル「人生劇場」)	1点
映画写真	(「人生劇場 残侠篇 昭和13年 」関係写真)	7点
映画ポスター	(「人生劇場 続飛車角」)	2点